

妻を 15 歳年下の男に抱かせ、
その一部始終を覗く夫

一度だけの寝取らせが、
本当の寝取られに変わる夜

第 1 話 扉の隙間

第 2 話 見せるための夜

(体験版は第 2 話までとなります)

第 3 話 閉じた目

第 4 話 妻から伸びた手

第 5 話 夫の知らない深さ

第 6 話 自分から

第 7 話 一度だけの約束

第 1 話

扉の隙間

細いクローゼットの扉の隙間からでも、妻の姿は驚くほどはっきり見えた。

美紀はベッドの縁に浅く腰かけている。

紺色のスカートは腰まで捲り上げられていた。

下着はもう身につけていない。

つい先ほどまで妻が穿いていた黒い布が、ベッド脇の床に落ちている。

美紀の背後には、二十六歳の陸がいた。

長い脚で美紀の身体を挟み込み、その背中を厚い胸板へ預けさせている。

美紀の身長は、百五十九センチ。

均整の取れた標準的な体つきだが、背の高い陸の両脚と腕のあいだでは、その身体がひと回り小さく見えた。

肩より少し長い暗い茶色の髪が乱れ、火照った頬へ幾筋も張りついている。

普段の美紀にはない姿だった。

陸の両手が、美紀の膝に置かれた。

ゆっくりと左右へ押し広げていく。

美紀は反射的に脚へ力を入れた。

だが、閉じることはできなかった。

夫にしか見せたことのなかった場所が、若い男の手によって晒されていく。

そのすべてが、クローゼットの和也から見えていた。

和也の頭のすぐ上には、固定具に取りつけたスマートフォンがあった。

カメラのレンズが扉の隙間からベッドを捉えるよう、あらかじめ角度を合わせてある。

画面の明るさは最低まで落とされ、録画時間を示

す数字だけが暗闇の中で静かに進んでいた。

二人が寝室へ入る前に、和也自身が録画を開始した。

すべてが終わるまで、スマートフォンへ触れる必要はない。

「ほら、美紀さん」

陸が耳元で囁く。

「ご主人が、あそこから見えていますよ」

美紀の目が、細く開いたクローゼットへ向けられた。

火照った顔。

潤んだ目。

息をするたびに震える唇。

夫を見つけた瞬間、美紀の頬がさらに赤くなる。

腰を引こうとするが、陸の身体が背後にあるため逃げられない。

「そんなに恥ずかしそうな顔をして、もう隠せませんよ」

「陸くん……脚、閉じさせて……」

「どうしてですか」

陸は両膝を持ったまま、さらに大きく開かせた。

「ご主人に見てもらうために、下着まで脱いだんでしょ」

「違う……脱がせたのは陸くんでしょう……」

「でも、止めなかった」

美紀は何も答えられなかった。

「さあ、美紀さん」

そう言うと、陸は両手に力を入れて、一息に美紀をすっきりと開かせた。

「あっ、……や、ッ……」

「ご主人に、美紀さんがどれだけ濡れているか見てもらいましょう」

「いや、っ……そんな……」

陸によってすっかり開かされた美紀の両脚。

捲られたスカート。

その下に、剥き出しになった美紀の股間。

暗いクローゼットの中からはっきりと分かった。

開かれた陰部はすっかり濡れ、寝室の照明を艶めかしく反射していた。

結婚して十五年。

これまで何度も妻の裸を見てきた和也でさえ、これほど濡れた美紀を見た記憶はなかった。

陸の指が触れるより先に、妻の身体だけが若い男を受け入れ始めているように見えた。十五年間、

美紀の身体を知っているつもりだった。

だが、夫に見られながら別の男に脚を開かれた妻が、これほど早く反応することを和也は知らなかった。

「見ないで……」

美紀がクローゼットへ向かって呟く。

けれど和也には、それが本当に見ないでほしいという意味なのか分からなかった。

美紀は顔を背けない。

夫がいる暗い隙間を見つめたまま、陸の腕の中にいる。

陸の右手が膝から離れる。

白い内腿を、指先でゆっくりとなぞっていく。

美紀の脚が細かく震えた。

「もう遅いですよ」

陸の指が、脚の付け根まで届く。

「ご主人には全部見えています」

「言わないで……」

「まだ少しも触っていないのに」

陸が美紀の肩越しに、クローゼットを見た。

和也へ直接語りかけるように続ける。

「もう、こんなに濡れています」

和也の喉が鳴った。

陸の指は、美紀の陰部へ触れる寸前で止まっている。

まだ、触れてはいない。

「違うの……」

美紀が首を横に振る。

「何が違うんですか」

「これは……和也に見られてるから……」

「本当に、それだけですか」

陸の指が動いた。

中指が、ゆっくりと割れ目の形を確かめるように滑る。

美紀の背中が大きく反る。

押し殺しきれなかった声が、寝室に漏れた。

「……っ、……あッ…！」

陸は美紀の濡れた肉に指を触れたまま、耳元へ唇を寄せる。

「声を我慢しなくていいですよ」

「……だめ、っ……聞こえるから……」

「聞かせるためでしょう？」

美紀の目が大きく揺れた。

「ご主人の前で、僕にどんな声を出すのか見せてあげてください」

陸の指がもう一度動く。

中指を割れ目の中心からずらすと、親指がすでに膨らんでいる美紀の突起の周囲をゆっくりと進む。

「……っ、……ああ、ツ……」

美紀が陸の腕を強く掴んだ。

止めるためなのか。

もっと触れさせるためなのか。

和也には判断できなかった。

ただ一つ分かるのは、妻の身体が、夫以外の男の指を拒んでいないということだった。

陸に促され、美紀の脚がさらに開いていく。

クリトリスの周囲を回っていた陸の親指が、膨らんだ先端へ触れた。

指の腹で、ゆっくりと撫でる。

次の瞬間、妻の唇から和也の知らない声がこぼれた。

「……あああ、っ！……あっ、あ、ッ……！」

和也がその掲示板を見つけたのは、三か月ほど前だった。

夫婦間の特殊な願望を扱う匿名掲示板。

夫婦で参加相手を募集する書き込みに混じって、妻の相手になる単独男性を探す投稿がいくつも並んでいた。

初めは見るだけだった。

自分が書き込むとは思っていなかった。

けれど、ページを閉じても、数日後にはまた開いた。

自分以外の男に触れられる美紀。

それを妻に気づかれながら、すぐ近くから見ている自分。

長く抱えていた想像が、現実にはできる距離まで近づいていた。

美紀は、派手さのない、落ち着いた美人だった。

柔らかな輪郭の顔に、穏やかな目元。

笑うと目尻に細い皺が寄る。

肩より少し長い髪を、普段は低い位置で一つにまとめている。

化粧も服装も控えめで、人前で目立つことを好まなかった。

四十一歳になった今も肌は白く、服の上から見える身体は、細すぎも太すぎもしない均整の取れた体つきをしていた。

だが、その服の下に、柔らかな胸の膨らみと、丸

みを帯びた腰や臀部があることを、和也だけは知っていた。

美紀へ打ち明けたのは、その一か月後だった。

「何を言ってるの」

最初は冗談だと思われた。

和也が本気だと分かると、美紀の表情から笑いが消えた。

「知らない男となんて、無理よ」

当然の反応だった。

和也もその場では話を終わらせた。

だが、完全には諦められなかった。

自分が隠れて見ていること。

いつでも止められること。

相手とは一度だけで、その後は連絡を取らないこと。

何度か話すうちに、美紀の返事は「絶対に嫌」から「考えさせて」に変わった。

そしてある夜、美紀が言った。

「本当に一度だけなら」

和也はすぐには返事ができなかった。

美紀が条件を続ける。

「あなたが同じ部屋にいること。それから、私が嫌だと言ったら絶対に止めること」

「あとで私を責めないこと」

和也は約束した。

そのときは、守れると思っていた。

掲示板へ募集文を書いたのは、その翌日だった。

《四十三歳の夫です。四十一歳の妻の相手をして
くださる単独男性を探しています》

一文字ずつ打ち込んだ。

《夫婦ともに合意しています。夫は同じ寝室のクローゼット内から見ます。今回限りです》

年齢は二十五歳から三十五歳。

独身。

清潔感があること。

夫による行為中の動画撮影に同意できること。

映像は夫婦での個人視聴に限り、外部公開や第三者への共有はしない。

避妊必須。

妻の拒否があれば、理由を尋ねず中止すること。

最後に、若い男を希望すると付け加えた。

そこまで書いて、和也の指が止まった。

若い男でなければならない理由を、自分でも分かっていた。

自分にはない身体。

自分よりも強い体力。

妻が否応なく違いを感じる相手。

それを求めたのは、ほかでもない和也だった。

投稿ボタンを押した。

数時間後には、十件以上の連絡が届いた。

だが、大半は募集文を最後まで読んでいなかった。

妻の写真を要求するだけの男。

露骨な言葉を並べる男。

夫には途中で退室してほしいと言い出す男。

すべて削除した。

その中に、相良陸からのメッセージがあった。

《二十六歳、独身です。募集文と条件を最後まで読みました》

文章は短く、丁寧だった。

《ご夫婦双方の合意が確認できること、撮影同意、

避妊、停止の条件、すべて守ります。必要であれば、先に三人でお会いします》

陸は自分から顔写真も添えていた。

短い髪。

整った顔立ち。

薄いシャツ越しにも分かる広い肩。

海辺で撮ったらしい全身写真には、長い脚と引き締まった身体が写っていた。

和也はしばらく、その写真を見つめた。

求めていた条件に、あまりにも合っている。

美紀がこの男に触れられるところを想像すると、興奮と同時に胃の奥が冷たくなった。

和也は、陸の写真とメッセージを美紀にも見せた。

美紀は写真をしばらく見つめたあと、まずは三人で会うことに同意した。

和也は陸へ返信した。

《ご連絡ありがとうございます。妻にも写真とメッセージを見せました。妻も、まずは三人でお会いすることに同意しています。直接お会いして、条件を確認させてください》

返事は数分後に届いた。

《承知しました。日程はご夫婦に合わせます》

続けて、もう一通表示される。

《一つだけ、直接お会いした時に、奥様ご本人の意思を確認させてください》

さらに短い文章が続いた。

《ご主人に頼まれて、奥様が断れずにいるということでしたら、お引き受けできません》

和也はその文章を二度読んだ。

妻の写真を追加で求めることもない。

どのような行為をさせてもらえるのかと、先走って尋ねることもなかった。

美紀本人が本当に同意しているのか。

陸が確認しようとしたのは、それだけだった。

十件以上届いた連絡の中には、自分の欲望ばかりを並べる男が多かった。

陸の文章からは、それが感じられない。

顔写真に写った鍛えられた身体とは対照的な、落ち着いた言葉だった。

この男なら、美紀を任せても大丈夫かもしれない。

そう思う一方で、写真の中の広い肩と長い脚を見直すと、美紀をこの男に抱かせるのだという事実が、急に輪郭を持った。

和也は返信した。

《もちろんです。その点も含めて、三人で確認させ

てください》

《分かりました。よろしくお願いします》

陸からの返事は、それだけだった。

三人で顔を合わせたのは、翌週の日曜日だった。

駅から少し離れたホテルのラウンジ。

明るく、人目のある場所を美紀が希望した。

先に着いた夫婦が並んで座っていると、約束の時間ぴったりに陸が現れた。

「相良です」

立ち上がった和也より、頭一つ近く高い。

写真で見るよりも肩幅があり、白いシャツの袖には腕の形がはっきりと出ていた。

美紀は陸を見上げたまま、一瞬言葉を失った。

すぐに目を伏せる。

その日の美紀は、淡い色のブラウスと膝下まであるスカートを選び、髪も襟足で一つに束ねていた。

身体の線を目立たせない、和也が見慣れている控えめな装いだった。

陸は露骨に妻の身体を眺めたわけではない。

それでも、美紀が目を伏せたあと、若い男の視線

が妻の顔から胸元へ一度だけ下りたのを、和也は見逃さなかった。

十五年間見慣れてきた美紀が、二十六歳の男から、一人の女として見られていた。

「妻の美紀です」

和也が紹介すると、美紀が小さく頭を下げた。

「初めまして」

「相良陸です。今日はありがとうございます」

陸は夫よりも先に、美紀へ向かって頭を下げた。

三人で席に着く。

最初の数分間、美紀はほとんど話さなかった。

陸が仕事や趣味について話し、和也が質問する。

ごく普通の会話だった。

それでも和也は、美紀がときどき陸の手や腕を見ていることに気づいていた。

飲み物が運ばれてくると、陸が美紀を正面から見た。

「一つだけ、奥様ご本人に確認させてください」

美紀の背筋が伸びる。

「はい」

「今回のことは、ご主人に無理に頼まれたわけではありませんか」

「違います」

美紀はそう答えたあと、膝の上で両手を組んだ。

「怖くないと言えば嘘になります。でも、和也が同じ部屋にいるなら……一度だけなら、やってみようと思いました」

陸が頷く。

「分かりました」

それ以上、美紀へ理由を尋ねなかった。

三人で当日の約束を確認した。

実行するのは土曜日の午後九時から十一時まで。

場所は宮坂家の寝室。

和也は先にクローゼットへ入り、扉の隙間から見る。

陸も美紀も、和也がそこにいることを知った状態で始める。

美紀が明確に「中止」と告げた場合は、その時点で終わる。

どのような状況であっても、陸はその言葉に従う。

撮影した映像は夫婦で見るためだけに保管し、外部へ公開したり、第三者へ渡したりしない。

避妊は必ず行う。

そして、実行は一度だけ。

陸が確認する。

「映像には僕の顔も映りますか」

「映る可能性はあります。ただ、外には絶対に出しません」

陸はゆっくりと頷き、続けて口を開く。

「終わったあとは三人での会話はなしで、僕が帰宅する。ということですね」

「はい」

和也が答えた。

美紀は黙って頷いた。

そこで和也は、もう一つ考えていたことを切り出した。

「当日まで、二人で連絡を取ってもらいたい」

美紀が顔を上げる。

「二人で？」

「初対面に近いまま当日を迎えるより、少しは知っている相手のほうがいいと思う」

「でも……何を話せばいいの」

「普通のことでもいい。仕事とか、好きなものとか」

和也は陸を見る。

「食事に行ってもらったりしても構わない。二人だけで」

美紀の目がわずかに見開かれた。

陸もすぐには答えなかった。

「それも、宮坂さんの希望ですか」

「そうです」

和也は言った。

行為だけを切り離して見せられるより、妻が若い男と親しくなっていく時間も含めて見たい。

そう考えていた。

ただし、その願望を二人の前で詳しく説明することはできなかった。

「分かりました」

陸が美紀へ視線を向ける。

「美紀さんが嫌でなければ」

美紀は夫と陸を交互に見た。

やがて、小さく頷いた。

「連絡くらいなら」

「ただし、当日まではキスと性行為は絶対にしな

いでもらいたい」

和也は念を押した。

「二人で会ってもいい。でも、そこだけは守ってほしい」

陸が答える。

「守ります」

美紀も頷いた。

顔合わせの最後に、二人は連絡先を交換した。

陸の名前が美紀のスマートフォンへ登録される。

その画面を見ながら、和也は胸の奥に奇妙な高

揚を覚えていた。

これで二人をつなげた。

自分の手で。

実行日までの二週間、陸と美紀は自由に連絡を取った。

和也は内容を見なかった。

美紀も報告しなかった。

ただ、リビングで美紀のスマートフォンが震える回数は、日を追うごとに増えた。

画面を見た美紀の表情が緩むこともあった。

誰からなのか尋ねなくても分かった。

一度目は、日曜日の午後に二人で出かけた。

美紀は普段より長く鏡の前に立ち、服を二度着替えた。

最後には、普段は結んでいる髪を下ろした。

肩へ流した髪を何度も手櫛で整え、毛先が内側へ向くように形をつけている。

鏡の前で一度横を向き、選んだ服が胸や腰の線を強調しすぎていないか確かめるように、自分の姿を見つめた。

唇にも、いつもより少しだけ赤みの強い色を重ね

た。

他人が見れば、気づかないほどの違いだったかもしれない。

だが、十五年一緒に暮らしてきた和也には分かった。

二度目は、平日の夜だった。

陸と食事をするだけで告げ、美紀は一人で家を出た。

何時まで一緒にいたのか。

どこへ行ったのか。

何を話したのか。

和也は聞かなかった。

聞かないことまで含めて、自分が許可したのだと思おうとした。

二度とも美紀は約束の時間までに帰宅した。

陸との間で何があったのかを話すことはなく、和也もスマートフォンを見せてほしいとは言わなかった。

キスも性行為もしていない。

約束さえ守られていれば、それでいいはずだった。

だが、寝室へ入った美紀がスマートフォンを手に取るたび、和也は無意識にその画面を目で追った。

実行日の前夜。

ベッドへ入ったあとも、美紀はしばらく誰かとメッセージを交わしていた。

やがてスマートフォンを伏せ、照明を消す。

暗闇の中で、和也は尋ねそうになった。

何を話していた。

明日のことか。

陸は何と言っている。

けれど、結局何も聞かなかった。

夫が知らない会話を、妻と若い男が持っている。

それさえも、明日のための準備なのだと自分へ言い聞かせた。

＊

今夜、美紀は髪を下ろしていた。

陸と初めて二人で出かけた日と同じように、暗い茶色の髪が肩を覆い、顔の輪郭を柔らかく包んでいる。

身体の線を拾う薄手のニットは、胸の膨らみと緩やかにくびれを、普段の服よりもはっきり見せていた。

紺色のスカートも、丸みのある臀部に沿っている。

その服を選んだのは和也だった。

だが、髪を下ろし、いつもより丁寧に唇へ色を載せたのは、美紀自身だった。

若い男と並んで寝室へ入ってきた妻は、十五年間見慣れてきた女とは、どこか違って見えた。

陸の唇が、美紀の唇へ触れた。

二人が寝室に入ってきて、まだわずかしかが時間が経っていなかった。

当日までは、絶対にしないと約束していたキス。

その境界線を、いま二人が越えた。

美紀の身体が強張っている。

腕は身体の横へ下ろされたまま。

陸へ触れようとしなない。

最初は唇を重ねるだけの静かなキスだった。

陸が少し顔を離す。

美紀が短く息を吸った。

その目は陸へ向けられている。

クローゼットへは戻らなかった。

「二週間、守りました」

陸が言った。

「はい……」

「今日まで、一度も触れなかった」

美紀の頬が赤くなる。

「それも、和也との約束だったから」

「分かっています」

陸の手が、美紀の腰から背中へ移る。

「でも、もう約束の時間です」

再び唇が重なった。

今度は先ほどよりも長かった。

陸が美紀の身体を引き寄せる。

胸元が密着し、美紀の背中が反る。

唇が離れたあと、美紀は息を乱していた。

「旦那さんに、よく見えるようにしましょう」

陸が美紀の身体の向きを変えた。

クローゼットに対して横向きに立たせる。

妻の火照った横顔と、それを見下ろす若い男の顔が、扉の隙間から同時に見えた。

「恥ずかしいですか」

「……はい」

「でも、見せるためにこうしてるんですよね」

美紀は答えなかった。

陸の指が顎へ触れ、顔を上げさせる。

「これで確認は終わりです」

低い声だった。

「ここからは、僕を見ていてください」

美紀の目が陸を捉えた。

陸が三度目のキスをする。

美紀の手が、初めて動いた。

陸の胸元に触れる。

押し返すのかと、和也は思った。

だが、その指は黒いシャツを掴んだ。

離れかけた陸を、自分のほうへ引き寄せる。

美紀はもう、クローゼットを見なかった。

第 2 話

見せるための夜

「奥さんがどんな顔で乱れていくのか、ご主人にもよく見えますよ」

陸が、美紀のニットを掴んだ。

裾が腹部まで持ち上げられる。

美紀は反射的に両手を下ろした。

肌を隠そうとしたのかもしれない。

陸はその手首を片手でまとめて掴んだ。

力任せではない。

だが、簡単には逃がさない。

「隠したら駄目でしょう」

「でも……」

「今日の服、ご主人が選んだんですね」

美紀が頷く。

「だったら、ご主人も」

陸がニットの裾をさらに引き上げる。

「僕がこれを脱がせるところを見たかったんですよ」

美紀の腹部が現れた。

へそ。

下着の下端。

緩やかにくびれた腰と、その下に柔らかさを残した下腹部。

和也が何度も触れてきた妻の肌へ、陸の指が這う。

美紀の身体が小さく震えた。

「ほら」

陸が耳元で囁く。

「また声が出ました」

「言わないで」

「どうしてですか」

「恥ずかしいから」

「恥ずかしがるところも見せるんでしょう」

陸が低く笑った。

「ご主人は、すぐそこで聞いてますよ」

美紀が唇を噛む。

それでも、クローゼットは見なかった。

目の前にいる陸だけを見ている。

和也は、妻がこちらを確認するのを待っていた。

陸に触れられる前。

最初のキスの前。

妻は三度、夫を見た。

そのたびに、自分がこの場の中心にいると思えた。

だが、深いキスを交わしてから、美紀は一度も隙間を見ていない。

陸が美紀の両腕を上げる。

ニットを一気に頭の上まで持ち上げた。

美紀が腕を抜く。

服がベッドの端へ投げられた。

黒いブラジャーに包まれた胸が現れる。

その下着を、和也は知っていた。

二年前の誕生日に、自分が選んだものだった。

若い男に見せるために買ったものではない。

夫が妻へ贈った下着。

それを今、陸が見下ろしている。

「これも、ご主人が？」

美紀が何を聞かれたのか分からないような顔をする。

陸の指が、黒い下着の縁をなぞった。

「下着」

美紀の頬がさらに赤くなる。

「……そう」

「ご主人が選んだ下着を着て」

陸の指が胸の間へ滑り込む。

「別の男に脱がされる姿を見せるんですね」

「そんな言い方……」

「違いますか」

美紀は答えなかった。

陸は返事を待たず、妻の背中へ腕を回した。

留め具が外れる音がした。

肩紐が両肩から落ちる。

美紀は胸を隠そうと腕を上げた。

陸が背その両手を掴み、身体の横へ下ろさせる。

「今さら隠しても遅いですよ」

黒いブラジャーが胸から離れる。

美紀の乳房が、若い男の前へ晒された。

和也の股間が強く疼いた。

形も、色も知っている。

どこに小さなほくろがあるかも知っている。

十五年間、自分だけが見てきた妻の胸だった。

陸が両手で包む。

肌と肌が直接触れた。

美紀の背中が反る。

口から、短い声が漏れる。

「……ん、っ……」

「やわらかい」

陸の指が乳房へ沈む。

「服の上から触った時より、ずっと」

「陸くん……」

「ご主人にも聞こえるように、もう少し声を出してください」

「無理よ」

「もう出てます」

陸の親指が、乳首を撫でた。

「……ん、……あ、ツ……」

美紀の声が大きくなる。

陸は妻の反応を見ながら、両方の乳房を交互に触れていく。

最初はゆっくり。

美紀の身体が熱を持ち始めると、指に少しずつ力を加える。

和也が教えたことを、陸は守っていた。

胸は最初から強く触れない。

乳首だけを急に責めない。

首筋と一緒に触れると反応しやすい。

すべて、自分が教えた。

陸の唇が、美紀の耳の下へ触れる。

「……ん、……っ、……」

妻の肩から力が抜けた。

そのまま首筋を下り、胸へ口づける。

美紀の手が、陸の頭へ伸びた。

止めるためではない。

指が若い男の髪へ入る。

陸が片方の乳首を口に含む。

美紀の身体が大きく揺れた。

「……あっ……！」

「……っ、……陸くん……」

「気持ちいいですか」

答えを待たず、舌を動かす。

「……っ、……だめ、ッ……」

美紀の指に力が入る。

「言ってください」

「……恥ずかしい」

「乳首を僕に吸われているところは、ご主人に見せられるのに？」

陸が顔を上げた。

「気持ちいいって言う方が、恥ずかしいんですか」

美紀は目を伏せた。

「……気持ちいい……」

「聞こえません」

「気持ちいい……」

「誰にされて？」

美紀の息が止まる。

陸の目を見る。

「陸くん……」

その答えを聞いた瞬間、陸が再び乳首を口に含んだ。

「……や、っ……ああ、ツ……」

美紀の声が寝室へ響いた。

和也の手は、無意識にズボンの上から硬くなった自分を掴んでいた。

自分が望んだことだった。

妻へ羞恥を与えてほしい。

夫以外の男に触れられていることを、意識させてほしい。

そう陸へ伝えた。

だが、実際に若い男から問い詰められ、妻がその名前を答えるのを聞くと、胸の痛みは想像より強

かった。

陸が美紀の肩へ手を置き、身体をクローゼットのほうへ向かせた。

その背後へ回る。

二人は縦に重なったまま、ゆっくりと後ろへ下がった。

陸の膝裏が、ベッドの縁に触れる。

陸が先に腰を下ろした。

美紀はまだ、クローゼットを正面にして立っている。

陸の両手が妻の腰へ回った。

そのまま後ろへ引き寄せられ、美紀も陸の前へ腰を下ろす。

二人が、ベッドの縁へ重なるように座った。

背後に陸。

その前に美紀。

クローゼットの中にいる和也からは、若い男の胸へ背中を預けた妻の姿が正面から見えている。

陸の両脚が、美紀の腰の左右へ伸びた。

逃げ道を塞ぐように、妻の身体を挟み込む。

陸の手が、紺色のスカートの裾へかかった。

白い腿を露わにしながら、スカートをゆっくりと腰まで捲り上げていく。

最後に残った黒いショーツが、和也の目に晒された。

美紀は咄嗟に、捲られた裾を両手で押さえた。

「手を離して」

陸が耳元で言った。

美紀の指が止まる。

「これも、ご主人に見せるんでしょう」

美紀は答えなかった。

やがて裾から手を離し、両手を胸元へ引き寄せた。

陸の指が、ショーツの両脇へかかる。

「腰を浮かせて」

問いかけではなかった。

美紀は両足を床につけたまま、わずかに腰を浮かせた。

陸がショーツを引き下ろす。

黒い布が臀部を越え、腿から膝へ滑り落ちていく。

美紀が腰を戻すと、陸はショーツをさらに足首まで下ろした。

促されるまま、美紀が片足ずつ持ち上げる。

陸が最後まで抜き取った。

つい先ほどまで妻が穿いていた黒い布が、ベッド脇の床へ落ちた。

美紀は両膝を固く閉じた。

スカートは腰まで捲られたまま。

その下には、もう何も身につけていない。

陸が後ろから妻の身体を両脚で挟む。

閉じられた美紀の膝へ、両手を置いた。

「脚、開きますよ」

確認ではなかった。これからすることを告げる声だった。

陸の両手が、美紀の膝に置かれた。

ゆっくりと左右へ押し広げていく。

美紀は反射的に脚へ力を入れた。

だが、閉じることはできなかった。

夫にしか見せたことのなかった場所が、若い男の手によって晒されていく。

そのすべてが、クローゼットの和也から見えていた。

「ほら、美紀さん」

陸が耳元で囁く。

「ご主人が、あそこから見えていますよ」

美紀の目が、細く開いたクローゼットへ向けられた。

火照った顔。

潤んだ目。

息をするたびに震える唇。

夫を見つけた瞬間、美紀の頬がさらに赤くなる。

腰を引こうとするが、陸の身体が背後にあるため逃げられない。

「そんなに恥ずかしそうな顔をして、もう隠せませんよ」

「陸くん……脚、閉じさせて……」

「どうしてですか」

陸は両膝を持ったまま、さらに大きく開かせた。

「ご主人に見てもらうために、下着まで脱いだんでしょう」

「違う……脱がせたのは陸くんでしょう……」

「でも、止めなかった」

美紀は何も答えられなかった。

「さあ、美紀さん」

そう言うと、陸は両手に力を入れて、一息に美紀をすっきりと開かせた。

「あっ、……や、ッ……」

「ご主人に、美紀さんがどれだけ濡れているか見てもらいましょう」

「いや、っ……そんな……」

陸によってすっきり開かされた美紀の両脚。

捲られたスカート。

その下に、剥き出しになった美紀の股間。

暗いクローゼットの中からはっきりと分かった。

開かれた陰部はすっかり濡れ、寝室の照明を艶めかしく反射していた。

結婚して十五年。

これまで何度も妻の裸を見てきた和也でさえ、これほど濡れた美紀を見た記憶はなかった。

陸の指が触れるより先に、妻の身体だけが若い男を受け入れ始めているように見えた。十五年間、美紀の身体を知っているつもりだった。

だが、夫に見られながら別の男に脚を開かれた妻が、これほど早く反応することを和也は知らなかった。

「見ないで……」

美紀がクローゼットへ向かって呟く。

けれど和也には、それが本当に見ないでほしいという意味なのか分からなかった。

美紀は顔を背けない。

夫がいる暗い隙間を見つめたまま、陸の腕の中にいる。

陸の右手が膝から離れる。

白い内腿を、指先でゆっくりとなぞっていく。

美紀の脚が細かく震えた。

「もう遅いですよ」

陸の指が、脚の付け根まで届く。

「ご主人には全部見えています」

「言わないで……」

「まだ少しも触っていないのに」

陸が美紀の肩越しに、クローゼットを見た。

和也へ直接語りかけるように続ける。

「もう、こんなに濡れています」

和也の喉が鳴った。

陸の指は、美紀の陰部へ触れる寸前で止まっている。

まだ、触れてはいない。

「違うの……」

美紀が首を横に振る。

「何が違うんですか」

「これは……和也に見られてるから……」

「本当に、それだけですか」

陸の指が動いた。

中指が、ゆっくりと割れ目の形を確かめるように滑る。

美紀の背中が大きく反る。

押し殺しきれなかった声が、寝室に漏れた。

「……っ、……あッ…！」

陸は美紀の濡れた肉に指を触れたまま、耳元へ唇を寄せる。

「声を我慢しないでいいですよ」

「……だめ、っ……聞こえるから……」

「聞かせるためでしょう？」

美紀の目が大きく揺れた。

「ご主人の前で、僕にどんな声を出すのか見せてあげてください」

陸の指がもう一度動く。

中指を割れ目の中心からずらすと、親指がすでに膨らんでいる美紀の突起の周囲をゆっくりと進む。

「……っ、……ああ、ツ……」

美紀が陸の腕を強く掴んだ。

止めるためなのか。

もっと触れさせるためなのか。

和也には判断できなかった。

ただ一つ分かるのは、妻の身体が、夫以外の男の指を拒んでいないということだった。

陸に促され、美紀の脚がさらに開いていく。

クリトリスの周囲を回っていた陸の親指が、膨らんだ先端へ触れた。

指の腹で、ゆっくりと撫でる。

次の瞬間、妻の唇から和也の知らない声がこぼれた。

「……あああ、っ！……あっ、あ、ツ……！」

陸の親指が、硬くなったクリトリスをもう一度擦る。

「……や……そこ……あッ……」

「まだ触ったばかりなのに」

陸が耳元で囁いた。

「もうこんなに硬くなっているんですね」

「やめて……言わないで……」

「これをご主人に見られているんですよ」

「……そんなこと……」

美紀の呼吸が急速に乱れていく。

陸の左手が乳房を包み、親指で乳首を撫でる。

唇は妻の首筋へ押し当てられていた。

乳首。

首筋。

クリトリス。

三か所を同時に刺激され、美紀の身体が陸の腕
の中で揺れる。

「……だめ、っ……」

美紀には、この行為を終わらせるための言葉がある。

——中止。

その一言を口にすれば、陸はすぐに手を止める。

三人で決めた約束だった。

だが、美紀はその言葉を口にしなかった。

陸の腕を掴んだ指は、押し退けるどころか、若い男を自分の身体へ引きつけるように強くなっている。

脚も閉じなかった。

陸の右手が、少し角度を変える。

親指をクリトリスの近くへ残したまま、中指を下へ滑らせていく。

指先が、濡れた膣口へ触れた。

入り口を押し開き、そのまま美紀の膣内へゆっくりと差し入れる。

「……ん、っ……ああッ……！」

美紀の腰が、指を迎えるように高く浮いた。

「旦那さんじゃない男の指なのに」

陸が、中指を膣内でわずかに曲げる。

「そんなに締めるんですね」

「……んっ……言わないで……」

中指を深く入れたまま、陸は親指を再びクリトリスへ重ねた。

指の腹が、小さな円を描くように動き始める。

「……あっ……ああ、ツ……！」

膣内を満たす中指。

クリトリスを擦る親指。

乳首を摘まむ左手。

美紀の身体が、三つの刺激の間で大きく揺れた。

「声を止めないでください」

「でも……」

「奥さんが僕の指でどんな声を出すのか、ご主人に聞かせてあげてください」

「……あっ……だめ……っ」

美紀の頭が、若い男の肩へ預けられる。

目は半ば開いたままだった。

潤んだ瞳からは焦点が失われ、正面のどこを見るでもなく揺れている。

クローゼットは見なかった。

和也は、妻が一度くらいこちらを確認すると思っていた。

恥ずかしさに耐えられず、夫へ助けを求める。

そうなるはずだった。

だが、美紀は陸の胸へ背中を預けたまま、親指の動きに合わせて腰を浮かせている。

「……ん、っ……ああ……陸くん……」

親指がクリトリスの同じ場所を擦り続ける。

美紀の呼吸が短くなった。

開かされた太腿が震え始める。

「もう……だめ……」

「何がだめなんですか」

陸は親指の動きを止めなかった。

「……いきそう……」

「僕の指で？」

美紀の唇が震える。

「……うん……」

「ご主人に見られているんですよ」

「……言わないで……」

「ほかの男にいかされるところを、ご主人に見られるんです」

美紀の頬が赤く染まった。

「恥ずかしくないんですか」

「……恥ずかしい……」

「見せたくないなら、我慢すればいいでしょう」

そう言うと、陸の親指が少し速くなった。

クリトリスの先端を、指の腹で細かく擦っていく。

「あっ……だめ……だめッ……！」

美紀の腰が跳ねた。

陸の胸へ背中を強く押しつけ、親指へ身体を擦りつけようとする。

「我慢してください」

「……できない……っ、ああ……！」

「そんなに気持ちいいんですか」

「あっ……気持ちいい……」

親指が、さらに速くなる。

「すごく……気持ちいい……っ！」

「それでも、いきたいですか」

問いかけと同時に、陸がクリトリスの最も敏感な場所を繰り返し擦った。

「あっ……い、きたい……！」

美紀の身体が大きく跳ねる。

答えた直後にも刺激が入った。

声がさらに切迫する。

「いきたい……っ、ああ……いきたい……！」

美紀が叫んでも、陸の親指は止まらなかった。

クリトリスを擦る速さも、ほとんど変わらない。

ただ、最も敏感な中心から、親指の腹をほんのわずかに外側へずらした。

「えっ……あ……っ、……」

美紀の腰が落ち着きを失う。

快感は途切れていない。

だが、最も欲しい場所からわずかに外れた親指を探すように、腰が何度も小さく動いた。

むしろ親指は同じ速さで動き続け、美紀の身体を絶頂の寸前に置いたまま、最後の一線だけを越えさせなかった。

「いきたいと言うだけでは駄目です」

陸が耳元で囁く。

「ご主人に聞こえるように、ちゃんとお願ひしてください」

「……そんなの……」

膣内へ入った中指は抜かれていない。

深く差し入れられたまま、わずかに曲げられている。

美紀はその指を何度も締めつけながら、クリトリスの中心から外れた親指を追うように腰を動かした。

「言えな……っ、ああ……！」

言葉の途中で、陸の親指が一度だけ中心へ戻った。

さらにもう一度、クリトリスの先端を強く擦る。

「あぁッ……！」

美紀の身体が大きく跳ねた。

だが、次の動きでは再び外側へずらされる。

届きかけた絶頂が、また遠ざかった。

「ちゃんとお願ひできたら、いかせてあげます」

美紀の唇が震えた。

焦点を失っていた視線が、一瞬だけ正面へ寄る。

顔は動かしていない。

瞳だけが、クローゼットの細い隙間へ近づいていく。

夫がそこで聞いている。

そのことを思い出したように、視線が揺れた。

だが、和也と目が合う前に、すぐ足元へ落ちた。

陸はクローゼットを見なかった。

美紀の肩越しから、火照った横顔だけを見下ろしている。

親指も止めない。

中心を外した場所を同じ速さで擦り、美紀の身体から快感を逃がさなかった。

「あっ……陸くん……お願い……」

「最後まで言ってください」

「そんなの……恥ずかし……っ」

陸の親指が、また一瞬だけクリトリスの先端へ触れた。

「あぁッ……！」

美紀の背中が反る。

開かされた太腿が激しく震え、足先まで強く伸びた。

親指はすぐに中心から外れる。

「お願いしてください」

低い声が、逃げ道を塞ぐ。

次の瞬間、陸の親指がクリトリスの中心へ戻った。

返事を催促するように、膨らんだ先端を続けざまに擦る。

一度。

「あっ……！」

美紀の肩が跳ねる。

二度。

三度。

「あぁッ……陸くん……！」

下腹部が大きく引きつり、開かされた太腿が震え

た。

さらに刺激が入る。

親指はもう中心から逃げなかった。

小さく、速い動きで、美紀の言葉を待つようにクリトリスを擦り続ける。

「あっ……ああ……もう……っ！」

美紀の口が大きく開いた。

もう、声を抑えようとはしなかった。

陸の腕へ縋りつき、寝室中へ響く声で叫ぶ。

「お願いっ、いかせてっ！ もう我慢できないっ…
…陸くん、お願い、いかせてえっ！」

和也は息を呑んだ。

十五年間の夫婦生活で、一度も聞いたことのない妻の懇願だった。

夫がすぐそこで聞いていると分かっているながら、美紀は若い男へ、絶頂させてほしいと叫んだ。

陸が耳元へ唇を寄せる。

「いいですよ」

膨らんだ先端を押さえながら、小さく、速い動きを繰り返す。

「あっ……や……あああッ……！」

美紀の身体が、陸の腕の中で大きく跳ねた。

膣内の中指は深く入ったままだった。

大きく出し入れすることはせず、わずかに曲げ、
美紀の内側を満たしている。

その状態で、親指だけがクリトリスの先端を正確
に擦り続けた。

「そこ……っ、ああ……そこ……！」

美紀の腰が浮く。

陸の親指へ身体を押しつけ、少しでも強い刺激を
得ようとする。

陸の左腕が、そんな妻の身体を胸元へ強く抱き寄
せた。

「あっ……ああ、ツ……もう……だめ……！」

開いた脚の先で、爪先がきつく伸びる。

陸の腕を掴んだ指へ力がこもり、爪が肌へ食い込んだ。

美紀の目が大きく見開かれる。

焦点を失った瞳が揺れ、眉が高く吊り上がった。

唇は声を出そうとする形のまま、大きく開いている。

それでも陸の親指は止まらない。

同じ速さで、クリトリスの中心を細かく擦り続ける。

「あっ……いく……！」

美紀の下腹部が大きく引きつった。

膣内へ入った中指を締めつけるように、身体の奥が何度も収縮する。

「いくっ……ああッ、陸くん……いく、いくうッ！」

絶叫とともに、美紀の背中が大きく反った。

開かされた太腿が痙攣するように震える。

仰け反った身体が、若い男の腕の中で短く何度も跳ねた。

陸は中指を膣内へ入れたまま、美紀の収縮を受け止めていた。

親指の動きだけを少しずつ緩め、クリトリスへ残る余韻を追うように撫でていく。

美紀は陸の胸へ背中を預けたまま、夫に見られながら最初の絶頂を迎えた。

和也は目を逸らせなかった。

妻は若い男の指によって崩れた。

その姿を、夫である自分に晒している。

これが見たかった。

ずっと想像していた。

だが、想像と違うことが一つだけあった。

美紀は、夫を見ていなかった。

絶頂の瞬間も。

身体の震えが収まったあとも。

妻の目は閉じられたままだった。

陸の指がゆっくり離れる。

美紀の脚から力が抜ける。

それでも陸は膝を閉じさせなかった。

乱れた妻の身体を、夫から見えるままにしている。

「ご主人に、全部見られましたね」

陸が言った。

美紀が薄く目を開ける。

「こんなに濡れて」

濡れた指を、妻の目の前へ見せる。

「僕の指で、あんな声を出したんですよ」

美紀が恥じるように顔を背ける。

陸が顎を掴み、自分のほうへ戻した。

そのまま腰へ腕を回し、美紀の上半身を後ろへ向
かせる。

美紀が振り返った。

二人の視線が重なる。

陸は何も言わず、美紀の唇を塞いだ。

触れるだけのキスではなかった。

唇を押し開き、妻の息まで奪うような深い口づけ
だった。

美紀の喉から、くぐもった声が漏れる。

初めは陸の肩へ置かれていた手が、やがて首の後ろへ回った。

逃げるためではない。

美紀は陸の髪へ指を差し入れ、自分からその顔を引き寄せた。

二人は何度も角度を変え、互いの唇をむさぼるように求め合う。

息を継ぐために離れても、どちらからともなく再び重なった。

濡れた音と、二人の乱れた呼吸だけが寝室へ響く。

美紀はもう、クローゼットを見なかった。

夫に見せるためではなく、目の前の若い男を求め

ている。

和也には、そうとしか見えないキスだった。